

誤射について

フィールドアー vol.31、69ページにおきまして、トモエガモをコガモと誤認した写真が掲載されました。これは製作者自体の知識不足が招いた誤報であり、出版という形で狩猟および自然環境に携わる本誌として、不徳の致すところであります。つきましてはこの場を借りてお詫び申し上げるとともに、その社会的責任として、狩猟において誤射を起こした際の対処方法を、当事者の経緯とともに報告させていただきます。

鳥獣保護管理法第2条第8項において、狩猟は「法定猟法により、狩猟鳥獣の捕獲等をする」と定義されており、狩猟鳥獣以外の鳥獣の狩猟は禁じられています。これは鳥獣の保護と管理、狩猟の適正化を図ることと、生物多様性の確保を目的とした規範です。生物多様性の確保とは、あらゆる生き物の個体数が絶妙にバランスすることで保たれる生態系の保全そのもの。先の法律は人間の勝手な決め事ではなく、本来自然の摂理として維持されるべき普遍的なものなのだ、深く理解するべきでありました。

今回の誤報を招いてしまった原因は、このような生き物に対する十分な理解と知識を得ていなかった編集部員の怠慢と言うほかなく、法律に携わる関連機関、鳥を愛し、生物多様性の確保に従事する方々、そして本誌を愛読いただいている皆さまに多大なご迷惑をお掛けしたことをお詫び申し上げます。

また、既出の自然の摂理が人間の自戒の念として法律化された背景には、急速な道具の発展があるように思われます。人間の生活様式そのものが野生動物の生活資源を搾取している現状を踏まえた上でも、銃器の発明が与えた影響は多岐に渡ります。確かに銃器は人類の英知が生み出した能力の一部ですが、一方で、それは個々の能力を問わず、偶然にも野生動物を殺められる可能性を秘めた道具なのです。誤射という事故自体、どこかでその自覚が薄れた時に起こるものなのではと、思わざるを得ません。出版という形で狩猟に携わり、銃器の性質を正しく伝えなければならぬ立場としても、今回の誤報には重責を感じ、認識を正していく所存です。銃器に携わる関連機関、そして銃器と正面から対峙し、命について深く考え、誠実な狩猟を続ける猟師の皆さまに多大なご迷惑をお掛けしたことをお詫び申し上げます。

当事者の経緯

フィールドアー vol.31「野営で巡る狩猟遠征記」の取材中、トモエガモの誤射に至った相馬拓也氏のその後の経緯を報告する。銃器による狩猟は各都道府県が狩猟免許を、住居地を管轄する警察署が猟銃免許を発行するため、誤射などの事故が起きた際は両者に連絡する必要がある。処置、処分等は同時並行的に行われるため、以下、現時点での報告として管轄を分けて記す。

事故後、相馬氏は自身の住まう都道府県庁の自然環境保全課にて、状況を伝える資料とともに事の経緯を説明した。雑誌に掲載されたことから、すでに環境省からも連絡が来ていたようだ。通常であれば厳重注意という措置が多いようだが、今回の件については雑誌に掲載されている等、社会的影響力が少なからずあるため狩猟免許の取り消し処分となる可能性が高いという。取り消しとなれば、向こう3年間は免許の再

取得ができない。何にしろ処分が決定するまで数か月の時間を要することだった。

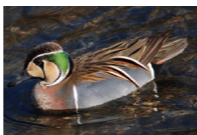
同じく管轄警察署の生活安全課にて状況を伝える資料とともに事の経緯を説明した。警察には既に通報が行っており、上申書を書くこととなった。猟銃という道具の性質上、それを管理しなければならない法執行機関・警察では当然厳しい取り調べが行われ、誤射は嚴重な事件として扱われる。こちらも捜査に時間を要するため現時点で懲役、罰金等の処分は決定していないが、書類送検となる可能性もある。

以上の通り、狩猟に関する各種法律は道路交通法のように一般的なものではなく、処分がすぐさま画一的に決定することはないようだ。今後の経緯については引き続き相馬氏と連絡を取り合い、処分が決定した際に報告する。

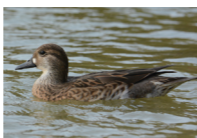
トモエガモの生態

トモエガモ (*Anas formosa*) はマガモ属に分類される鳥類で、極東アジアにのみ生息する希少な種。ロシア極東部で繁殖し、日本や韓国、中国などで越冬する。日本国内では主に石川県や新潟県、島根県などの日本海側に飛来し、湖沼や河川、水田で種子などを食べて過ごしている。

現在の推定総個体数は50万羽から100万羽とされるが、大きな群れを形成する特性から日本海側以外の地域での観測は珍しい。環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類 (VU) / 絶滅の危機が増大している種とされている。古くは食用とされていた時代もあり、味が良いことから、アジアで呼ばれたが、20世紀後半にその生息数は激減した。開発による生息地の破壊、乱獲が原因と指摘されているが、よく分かっていない。近年、韓国や日本での保護活動もあ



トモエガモ・雄



トモエガモ・雌

り、個体数は回復傾向にあるものの、以前の水準には至っていない。形態は全長40cm前後で、繁殖期のオスには黒、緑、黄、白の「巴」状の模様が入り、その名の由来にもなっている。一方、メスは全身の羽衣が褐色で黒褐色の斑紋が入り、くちばしの基部に白い斑紋が見えるのも特徴となる。

以上のことからトモエガモは、生物多様性の確保に従事する方々が懸命に調査を重ね、個体数を増やそうと尽力する対象種であることがわかる。また、鳥を愛する世界中の人々からも、希少な種として大切に見守られている鳥だ。もちろん、多くの狩猟者はそれを知っていて、同定が難しいメスガモを仕留める際は十二分な時間を費やしている。猟果からくる焦り、咄嗟の緊張状態をコントロールできないうちは、そもそもメスガモを対象とすべきではない。